

二〇二〇年度

福岡女子大学第六十八回卒業証書・学位記  
及び大学院第二十七回学位記授与式 式辞

二〇二〇年度（令和二年度）の学部と大学院卒業の皆さん、おめでとうございます。二〇十九年度は、コロナ禍のため、卒業式は中止となり、学長メッセージを紙媒体で卒業生に配付しました。二〇二〇年度の授業は、後半から対面とオンラインの併用で行い、多くの教育活動が通常と異なりました。今年の卒業式も学科分散型となりましたが、卒業式を挙行することができたことを、大変嬉しく思っています。

福岡女子大学は一九二三年に日本最初の公立女子専門学校として創立されました。「次代の女性リーダーを育成」を大学の基本理念とする福岡女子大学を巣立つ、学部学生237名、大学院生15名の皆さんと、ご家族の方々にご心よりお慶び申し上げます。また、公務御多用にもかかわらず、学部卒業式・

大学院修了式にご臨席賜りました福岡県 県知事  
代理 福岡県 副知事 大曲 昭恵（おおまがり  
あきえ）様、福岡県議会 議長代理 福岡県議会  
副議長 江藤 秀之（えとう ひでゆき）様に、福  
岡女子大学を代表して厚く御礼申し上げます。

福岡女子大学は、二〇一一年から始めた教育改革  
以後、教育分野で目覚ましい進化と発展を遂げてきま  
した。THE（タイムズ・ハイヤー・エデュケーシ  
ョン）の世界大学ランキング日本版の女子大学ラン  
キングでは、ここ数年二番目の大学にまで進化して  
きました。二〇二〇年度までの福岡女子大学の教育分  
野の進展に関しては、今年の年の挨拶にまとめてい  
ますので、お読み下さい

通常の卒業式でしたら、大学で何を学び、社会に  
出たらどの様に活躍すべきかの話をしますが、今年  
の式辞では、今までと少し変則的な内容にさせてい  
ただきます。コロナ禍でない通常の卒業式式辞では、  
福岡女子大学で勉強した皆さんに、大学での皆さん  
の成長と大学自身の変化、特に「教育の質の変化」

と「国際化の深化」についてお話しています。今回はコロナ禍ですから式辞の視点を少し変えて、「必死に考える」と「コロナ禍での精神状態のコントロール」に関して、お話したいと思います。

まず皆さんに、「必死に考える」ことについてお話します。何故「何事にも必死に考える」ことが必要でしょうか。私達の人生では様々な苦難に出会います。真剣に考えることをせず、面倒だからと言って、他人に任せることも多いと思います。コロナ禍でも自分が責任を持つべきこともせず、他人に全て任せるという無責任なことをしていませんか。深く考え、自分の意見を他人に伝えることによって、社会を変化させることも可能です。第二次世界大戦の時も、多くの日本国民は、国や軍に対して、自分の意見を言わず、日本国民が黙ったことが、多くの近隣諸国を巻き込んだ悲惨な戦争になってしまいました。日本国民が意見を持ち、もう少し提案する訓練をしていたら、結果は変わっていたかもしれません。

次に、「コロナ禍での精神状態のコントロール」についてお話ししましょう。コロナ禍では、精神状態が正常でなくなり、通常のメンタルの状態と変わることもあります。多くの方が「死にたい」と思う希死感情を多くの方が持ったことが多数報じられています。新聞によると、2020年8月の自殺者は2019年の2倍以上で、特に女性の自殺者が多いことが報じられています。更に、親が我が子に折檻をし、死に至らせる事件も多くありました。本来は、命は天から与えられたもので、誰も粗末に扱っていないわけではありません。どんな理由が有っても命を粗末にすることは許されないことです。

ここで、終わりのない病気と闘っている子供の詩を皆さんに聞いていただきたいと思います。誰も粗末にできない命の大切さを「電池が切れるまで」という本から「命」というタイトルの詩（し）を紹介いたします。長野県立こども病院には長期入院している子供達が学ぶ院内学級があります。「命」は、その院内学級に所属していた「宮越 由貴奈」（みややしゆきな）さんの詩です。「命」は由貴奈さんが小学

4年生のときに書きました。由貴奈さんのお母さんの陽子さんの言葉と、由貴奈さんの詩に出会い、この本を執筆された―宮本雅史（みやもと まさふみ）さんの文章も加えましょう。短い文章ですが、「電池が切れるまで」の由貴奈さんの詩を読むと自殺行為のむなしさが心に残ります。「電池が切れるまで」の本の中には、院内学級の子供達の文章が多くありますが、「命」と向き合わずにはいられない日々の中で、子供達の病氣と闘う姿が伝わってきます。由貴奈さんの詩を朗読してくださるのは、中嶋恵子（なかしま けいこ）さんです。中嶋さんは、聴講生3千名程の九州市民大学の運営委員で、「西日本新聞TNC文化サークル」の話し方講師の方です。―それでは、中嶋恵子さんに出会っていただきましょう。

―由貴奈（ゆきな）さんの詩―

小学4年生 宮越 由貴奈

「命」

命はとても大切だ

人間が生きるための電池みたいだ  
でも電池はいつか切れる  
命もいつかはなくなる  
電池はすぐにとりかえられるけど  
命はそう簡単にはとりかえられない  
何年も何年も  
月日がたつてやつと  
神様から与えられるものだ  
命がないと人間は生きられない  
でも

「命なんかいらない。」  
と言つて

命をむだにする人もいる  
まだたくさん命がつかえるのに  
そんな人を見ると悲しくなる  
命は休むことなく働いているのに  
だから 私は命が疲れたと言うまで  
せいっぱい生きよう

宮越由貴奈さんの母 陽子さんの文章です。

五歳の時、神経芽細胞腫と診断され十一歳で亡くなりました。

信州大学病院での抗ガン剤治療や腎臓を片方取る手術に始まり、こども病院に移つての自家骨髄移植やその他にもいろいろなつらい治療を受けながら、入退院を繰り返していた頃、書いたものです。それにちようど院内学級で電池の勉強をしたばかりだったそうです。書くことがそんなに得意ではなかった娘のこの『命』という詩は、十一年という短いけれども凝縮された人生の中で得た勉強の成果なのではないかと思えます。

母 陽子さんから、由貴奈さんの話を伺っていたジャーナリストの宮本雅史さんの文章を最後に浴えましょう。由貴奈さんの最後の場面です。

仕事の帰りに病院によつたお父さんが、

「そろそろ帰るかな」

といいながらいすから立ちあがると、うとうとしていたゆきなちゃんが、「こわい」

と、つぶやきました。

「だいじょうぶだよ。お母さんがいるから、なにもこわくないよ。安心してねなさい」  
お母さんが声をかけると安心したのか、ゆきなちゃんはそのまますつとねむってしまいました。

ところが、つぎの日の明け方、お母さんがまだねているゆきなちゃんのようすをみると、また意識がなくなっていたのです。

そして、そのまま、ゆきなちゃんは目をさますことはありませんでした。

ゆきなちゃんは、お星さまになったのです。

「命」の詩のさいごにある、

「だから 私は命が疲れたと言うまで せい  
いっぱい生きよう」ということばのとおり、  
ゆきなちゃんの人生でした。

「命が疲れたというまでせいっぱい生きよう」という言葉は、長野県立こども病院のたくさんの子供達からのメッセージです。皆さんは、命の大切さ

を十分理解されたことと信じています。皆さんにお  
願います。社会の苦難に負けない精神力を養って  
下さい。

日常生活が異常になっていることを「必死に考え」  
ポジティブ思考に変え、強く生きて下さい。始めに  
申しました様に、今年の卒業式の式辞は、いつもの  
訓示調とは少し変わっていますが、「必死に考えて」  
今後の人生を豊かなものにして下さい。

「必死に考えて、自分の意見を提案できる  
人間に成長しよう」

二〇二二年三月十七日

公立大学法人福岡女子大学  
理事長・学長 梶山 千里